

【資料紹介】五所川原市相野山遺跡出土石器

齋藤 岳¹⁾

Stone Tools Found at Ainoyama Site in Gosityogawara City
SAITO Takashi

キーワード：相野山遺跡、縄文時代草創期、尖頭器製作、剥片、金木高校郷土研究部、会誌『東日流』、青森県内高等学校所蔵・旧蔵資料の活用

はじめに

五所川原市金木の相野山遺跡は青森県立金木高校の郷土研究部の生徒により昭和40年に発見された遺跡である。昭和43年に刊行された会誌『東日流』第3号(注1)に遺跡の発見の経緯と概要、尖頭器や削器など主だった石器計7点が図化された(工藤ほか1968)。うち1点は剥片の中でも唯一、微細な剥離痕があるために図化されたという。残る多数の剥片のうち21点は写真で紹介されている(巻頭図版Ⅲ)。

その後、尖頭器は縄文時代草創期の資料として改めて図化されて、丁寧な観察が行われている(中村2006)。

さて、当館は金木高校の郷土研究部に在籍された方から、2009年に相野山遺跡の出土石器31点の寄附を受けた(受入番号2079-10~40)。筆者は、青森県内の縄文時代前期から中期の遺跡の石器整理をした経験を持つが、それらの石器に比べて明らかに器表面の風化が進んでいた。石槍などの両面加工の石器は、青森県域では縄文時代前期にも精巧なものが製作される(安斎2010など)。しかし、新しい欠損部分に比べて、石器表面の風化状況が、はるかに古い事に目が引き付けられた。そのため、旧石器時代から縄文時代草創期の資料として受け入れた。

令和5年度の考古分野の調査研究は「青森県内出土考古資料の所在調査」の1年目である。調査は、①県外にある青森県ゆかりの考古資料の活用と②青森県内高等学校所蔵・旧蔵資料の活用を図るために実施する。特に②に関しては、戦後から昭和40年代までは高等学校部活動での社会科調査研究が盛んであり、歴史・地理・民俗分野など多岐に及ぶものの、現在この活動に関する資料や記録類は少なくなっていることから、当時の資料を調査記録している。その調査の一環としても、金木高校郷土研究部の活動に関連した相野山遺跡の採集品の一部として資料紹介する。

また相野山遺跡の尖頭器製作に関する資料の一部として、さらには帰属時期を考える情報となる器表面の風化状況を伝えるものとしても重要と考える。

さらに、『東日流』で写真紹介されていた剥片と同一母岩の可能性のあるものが含まれていた事も重要と考える。

1 相野山遺跡の石器採集地点

五所川原市相野山遺跡は、五所川原市金木庁舎から約4km東の標高約70mの段丘上に位置する。

工藤ほか(1968)の報文によると、「新設された道路の傍に大きな石槍を発見したのは、昭和40年の夏のはじめであった」。道路新設にともなって形成された「切り通し下部には、排水用のコンクリート製の樋が並んでおり、その中には、上から流れ落ちた赤土がつもっている」として、その赤土の中から石器が採集されたと記載している。報文の最後は、「先日、かれすすきの道をたどりながら久しぶりに遺跡を訪れてみた。私達が何回となく足を運んで調べてきたそこには、農作業小屋が建てられるとかで、もう井戸がつくられていた。ほりちらかされた多量の土石に初冬の陽があたっていた。」として結ばれている。刊行雑誌の奥付によると印刷は昭和43年1月20日である。以上の記載を総合すると、昭和40年夏から42年11月頃までに金木高校郷土研究部の生徒らによって相野山遺跡の踏査と採集が続けられたようである。

寄附を受けた31点の剥片の石材は、黒曜石製が1点、珪質頁岩製が30点である。寄附された方によると、黒曜石製の1点は、県道からの遺跡への入り口となる道路の坂を上りきった三差路の道路の西側、崖よりの部分で採取したとのことである。残りの30点の珪質頁岩製の剥片は、黒曜石の採取地点から50mほど北西の、道路の西側、崖よりの位置である。用水路の改修で露出した黄褐色土層から出土したという内容であった。かつて相野山遺跡の標柱のあった場所付近とのことであり、東日流で報告された石器の採集地点と同一と考えられる。

以上から、相野山遺跡では従来知られていた珪質頁岩製の尖頭器や剥片が発見された地点のほかに、約50m離れた黒曜石製剥片1点が発見された地点にも石器集中地点が存在する可能性もある。

1) 青森県立郷土館 学芸課副課長・副参事(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

遺跡の現状は、畑と休耕田となっている。かつてあったとされる遺跡の標柱は、現在は残っていない。筆者は数回、踏査したが、草に被覆されており、石器を採集できていない。

さて、相野山遺跡の北東約 20 km の場所には、津軽山地をはさんで、縄文時代草創期の大平山元 I 遺跡が位置している。その立地に関しては、石器石材産地である事が影響したと考えられている。外ヶ浜町教育委員会による蟹田川上流域での珪質頁岩の産状調査（外ヶ浜町教育委員会 2011）や岩石学的調査（佐々木・柴 2019）等が継続され、遺跡群の西側にある小泊層で良質な珪質頁岩が得られることが確認されている。

さらに人の移動を考えるうえでも、蟹田川とその支流を利用すると陸奥湾と津軽海峡（西本ほか 2000）、津軽山地をはさんで津軽平野への行き来に利点がある。

相野山遺跡も同様に上流域に小泊層が分布する金木川に面しており、珪質頁岩の採取に地の利がある。津軽平野に面した段丘の端に立地し、南北の往来に、そして津軽山地をはさんで陸奥湾側に行き来することも可能である（注 2）。

寄附者の方は、相野山遺跡には土地造成を免れた残存部分がある事を強調されていた。遺跡の現状からも大きな土地改変が行われた痕跡は見当たらない。尖頭器等の採取地点の近くに削平を免れた部分が残存する可能性がある。

2 出土石器の観察

寄附をうけた剥片を石材の特徴から A から M まで 13 のグループに分類した。珪質頁岩製の採集品では「母岩」別の分類までの精度を保てないため、より広く、グループとした。石材グループごとに表 1 と図 3～5 に掲載する。グループ A から F は、斑状に黒色と灰白色の色が入る。類似した斑状の入り込みを持つ剥片は、東日流に写真掲載されている。写真がモノクロであるうえコントラストが弱く、特定は難しい。また、図 3-11 の裏面のローマ字の「V」字状の線状の模様類似するものが、『東日流』第 3 号掲載の剥片の中に見られる（図 2）。

グループ M とした黒曜石製の剥片 1 点は小形であり、球顆がみられず良質である。層状の色の違いが認定でき、流理構造としてとらえられる。そのため、肉眼による観察では青森県深浦産の可能性もある。

珪質頁岩製のものは幅広の縦長剥片が多く、横長剥片を含む点で、『東日流』に掲載された剥片と共通する。打面を欠失しているものが多い。打面を残すものは複数の剥離面を打面とするものと、線打面あるいは小打面のものがある。

図 4-16・20 のように打面を欠失している剥片があり、いずれも主要剥離面の剥離の方向性と、上部の正面側あるいは裏面側に残る欠損面の剥離の方向性は同一である。剥片剥離の際に、ほぼ同時に 2 片にわかれた可能性がある。

幅の広い剥片は、側面が湾曲しているものが多く両面調整の石器製作時に生じるポイントフレイクを含む。

おわりに

相野山遺跡出土石器については、当初、土器が採集できず、石器のみが切り通し断面及び削り出された赤土から出土したことから、「無土器時代の石器」として考えられていた（工藤ほか 1968；注 3）。青森県の遺跡台帳でも遺跡番号 205106、旧石器時代、散布地として記載されている。その後、縄文時代草創期の資料として尖頭器は再実測され、石刃素材の削器も新たに実測されている（中村 2006）。

青森県立金木高校は令和 5 年（2023 年）3 月 31 日に閉校となった。巡りあわせもあり、同校郷土研究部で青春を送った方の資料の図化・紹介ができた。金木高校に残っていた資料のうち、つがる市石神遺跡の資料は、つがる市教育委員会に、五所川原市内の資料は五所川原市教育委員会が現在は所蔵している。

本稿での資料紹介により、さらに相野山遺跡や金木高校郷土研究部の活動に関する情報が得られる事を期待したい。

謝辞

重要な資料を当館に寄附していただき採集当時の情報をご教示いただいた大橋公二氏に、心より感謝申し上げます。

注釈

（注 1）『東日流』第 3 号の「3」の文字の上から「4」の青いゴム印が押されたものを、郷土館は所蔵している。川口潤（2010）のデータベースでは、第 4 号としている。一方で、相野山遺跡の報告誌は、『東日流』第 3 号として紹介される事が多い。本稿では、相野山遺跡の石器を紹介した中村（2006）の記載にあわせて、第 3 号として記載する。

（注 2）大平山元 I 遺跡は、陸奥湾側から蟹田川沿いに津軽半島北端へと向かう主要地方道（青森県道 14 号今別蟹田線）と津軽山地を超えて津軽平野の国道 339 号へと向かう主要地方道（青森県道 12 号鱒ヶ沢蟹田線）の交差する位置である。津軽半島部では、地理情報システムによる分析で、縄文時代中期後半から後期にかけての主要遺跡間の交通路の復元が行われている。分析では、津軽海峡と陸奥湾をつなぐ交通路上に大平山元の遺跡群が位置している（西本ほか 2000）。相野山遺跡もまた、津軽平野側の国道 339 号から金木川沿いに津軽山地を超えて陸奥湾側に向かう主要地方道（青森県道 2 号屏風山内真部線）に面している。国道 339 号にも近い。いずれも人の移動の要所と考えられる。

(注3) 相野山遺跡について書かれた文献には段丘上へと「登りついた所が遺跡で造林をした平坦地があります。おそらく、造林のためにブルドーザーでもかけたのでしょう、赤土が現われています。赤土はソフトロームで柔らかく、その赤土からフレイクが採集できます。土器は見つかりませんでしたので、この遺跡は旧石器時代の遺跡として知られています。」と紹介されている(鈴木編 1981)。削られて押し出された黄褐色土(赤土)からの出土品が、即座に古い時期の資料と結びつくとは限らないが、多数の剥片が出土しているのに、土器片が全く伴わない。そのため、土器の出土点数が少ない縄文時代草創期以前の可能性が高いと考える。本稿で紹介した石器器表面の風化からも、それが裏付けられると考えたい。

引用参考文献

安齋正人 2010 『日本人とは何か』 同成社
 工藤純子・長利ゆり子・吉井ミヤ・工藤典子 1968 「相野山遺跡」『東日流』第3号 青森県立金木高等学校郷土研究部
 佐々木実・柴正敏 2019 「大平山元遺跡出土頁岩の蛍光X線分析」『史跡 大平山元遺跡』青森県外ヶ浜町教育委員会
 白川昭子・大橋公二・沢田京子・松橋照子 1968 「へび沢遺跡」『東日流』第3号 青森県立金木高等学校郷土研究部
 鈴木克彦編 1981 「相野山遺跡」『青森県の遺跡めぐり』 亀ヶ岡文化研究会
 外ヶ浜町教育委員会 2011 『大平山元 旧石器時代から縄文時代への移行を考える遺跡群』
 中村真理 2006 「青森県金木町相野山遺跡」『考古学』IV
 西本豊弘・津村宏臣・谷正和・新美倫子・齋藤岳・秦光次郎 2000 「コンピュータグラフィックによる遺跡景観の復元-青森県三内丸山遺跡を例として-」『動物考古学』第15号
 村越潔 1976 「金木地方の歴史- (一)先史・原始時代」『金木郷土史』金木郷土史編さん委員会
 川口潤 2010 「都道府県別遺跡集成の解説と遺跡分布図 22 青森県」『日本旧石器学会日本列島の旧石器時代遺跡-日本旧石器(先土器・岩宿)時代遺跡のデータベース-』日本旧石器学会

表1 石器観察表

番号	グループ	石材の特徴	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	受入番号	打面	末端	備考	
1	A	『東日流』に写真掲載された剥片に似るが同一母岩と判定できない。3点すべて打面なし。上部欠損 身部から末端側残片。7.5Y6/1灰色を基調とし。筋状・斑状に7.5Y4/1灰色・7.5Y8/1灰白色の部分あり。珪化弱い。	剥片	4.1	5.5	1.4	25.0	12	欠失	ステップ	背面右上と裏面末端に不整な剥離面。層状に入る石の目で割れ	
2	A	『東日流』に写真掲載された剥片に似るが同一母岩と判定できない。筋状・斑状に7.5Y4/1灰色・7.5Y8/1灰白色の部分あり。珪化弱い。	剥片	3.6	2.0	0.6	2.8	19	欠失	フェザー	右側縁微細剥離痕か	
3	A		剥片	2.5	2.5	0.4	1.4	26	欠失	ステップ		
4	B		『東日流』に写真掲載された剥片に似る。珪化やや弱い(Aに似るが)。珪化が少し進む)。7.5Y4/1灰白色を基調とし。筋状・斑状にN3/1の暗灰色から7.5Y4/1灰色の部分あり。	剥片	8.1	13.0	1.7	135.3	35	線打面	ヒンジに近い	大型の横長剥片。不整な剥離面。層状に入る石の目で割れ。背面側には不整楕円形様の深さ2cm程度のくぼみを伴って割れ。背面右上に切りあいを持つ剥離面
5	C	『東日流』に写真掲載された剥片に似るが同一母岩と判定できない。7.5Y6/1灰色を基調とする。A・Bに比べて珪化が進み。色も筋状・斑状に入る部分の黒味がより強く7.5Y4/1灰色からN4/1灰色。	剥片	8.0	4.9	1.1	31.9	10	小打面	ヒンジ	背面右上に切りあいを持つ0.4×0.3cmの打面。下面は切りあいを持つ剥離面	
6	C		剥片	3.6	5.0	1.0	9.9	24	切りあう剥離面	欠損	横長剥片、ポイントフレイク	
7	C		剥片	2.0	2.5	0.2	0.9	25	欠失	ヒンジ	ポイントフレイクか。厚さは薄い	
8			剥片	5.2	4.8	0.6	12.0	36	切りあう剥離面	ヒンジ	背面節理面。厚さは薄い	
9	C		剥片	5.0	4.9	1.4	18.8	22	切りあう剥離面	ステップ	横長剥片	
10	C		剥片	3.8	1.6	0.3	1.7	27	欠失	フェザー	厚さの薄い縦長剥片	
11	D		7.5YR5/4にぶい褐色。筋状・斑状に灰白色。筋状・斑状の部分は『東日流』に写真掲載された剥片に似る。	剥片	5.0	4.5	1.3	15.2	11	切りあう剥離面	欠損	側面は湾曲する。ポイントフレイク
12	E	『東日流』に写真掲載された剥片に似るが同一母岩と判定できない。筋状・斑状に黒味と灰白色が入る。N4/1灰色。『東日流』に写真掲載された剥片に似る。	剥片	6.7	3.4	0.8	9.6	17	点打面	ヒンジに類する	ツインバルブ	
13	F	『東日流』に写真掲載された剥片に似る。珪化やや弱い。厚さが薄い剥片2点からなる。2.5Y7/1明オリーブ灰色	剥片	7.7	6.0	1.2	27.7	14	欠失	フェザー	背面末端付近に礫面あり。厚さは薄い	
14	F		剥片	7.1	4.6	0.5	12.8	32	小打面	フェザー	小打面だが、線状で切りあいを持つ剥離面。厚さは薄い	
15	G	10GY5/1緑灰色。 珪化弱い。色N4/1灰色 色7.5Y4/1灰色。0.1~0.2cmの点状の不純物入る。ガジリは黒く、器表面の風化を伝える。	剥片	5.6	5.8	1.6	25.9	16	欠失	ステップ	側面は湾曲する。ポイントフレイク	
16	G		剥片	7.4	5.9	1.2	30.0	21	欠失	ヒンジ	側面はやや湾曲する。ポイントフレイクか	
17	H		剥片	6.9	7.0	1.9	90.9	13	欠失	フェザー	背面のほとんどは礫面	
18	I		剥片	8.0	5.1	1.7	25.0	18	切りあう剥離面	フェザー	礫面あり。下部はヒンジフラクチャー様のうねりを持つ	
19	I		剥片	5.0	3.0	0.5	5.4	20	線打面	ステップ	厚さは薄い。側面はやや湾曲。礫面あり。ポイントフレイク	
20	I		剥片	7.9	5.3	0.7	17.6	31	欠失	フェザー	厚さは薄い	
21	I		剥片	2.4	2.4	0.2	0.6	37	欠失	フェザー	厚さは薄い	
22	J		色5Y7/2灰白色から5Y7/3浅黄色。珪化やや弱い。	剥片	3.8	5.3	0.9	13.9	23	欠失	欠失	背面上半に不整な剥離面。層状に入る石の目で割れ。礫面あり
23	J			剥片	1.9	2.4	0.4	1.5	28	細長い小打面	欠失	打面は0.6×0.2cmの切りあいを持つ剥離面。厚さは薄い。ポイントフレイク
24	J			剥片	3.6	1.7	0.7	2.7	29	小打面	欠失	礫面あり。側面はやや湾曲
25	J	剥片		9.5	7.2	2.0	89.5	34	切りあう剥離面	フェザー	側面はやや湾曲する	
26	J	剥片		7.5	7.1	1.8	51.8	39	欠失	フェザー	側面はやや湾曲する。礫面あり	
27	J	剥片		3.5	2.7	0.5	1.2	33	欠失	フェザー	側面はやや湾曲する	
28	J	剥片		3.6	2.0	0.5	1.7	30	細長い小打面	ステップ	打面は0.6×0.2cmで切りあう剥離面。側面はやや湾曲。厚さは薄い。ポイントフレイク	
29	K	色5Y7/1灰白色。		剥片	1.4	5.6	0.9	8.9	38	欠失	ウーラバッセ	側面はやや湾曲。横長剥片
30	L	色5Y7/2灰白色。珪化やや弱い。ガジリは黒く。器表面の風化を感じさせる。	剥片	4.8	6.3	10.3	18.7	15	礫打面	ヒンジ	横長剥片	
31	M	黒曜石。球顆が無く、層状に流理が観察できることから肉眼的には深浦産に似る。	剥片	3.2	2.0	0.8	2.0	40	欠失	ヒンジ	側面はやや湾曲	

珪化状況に特段の記載のない石材の珪化は普通である



図1 青森県遺跡地図(青森県HP)の中里・大倉岳・金木・源八森図幅を改変

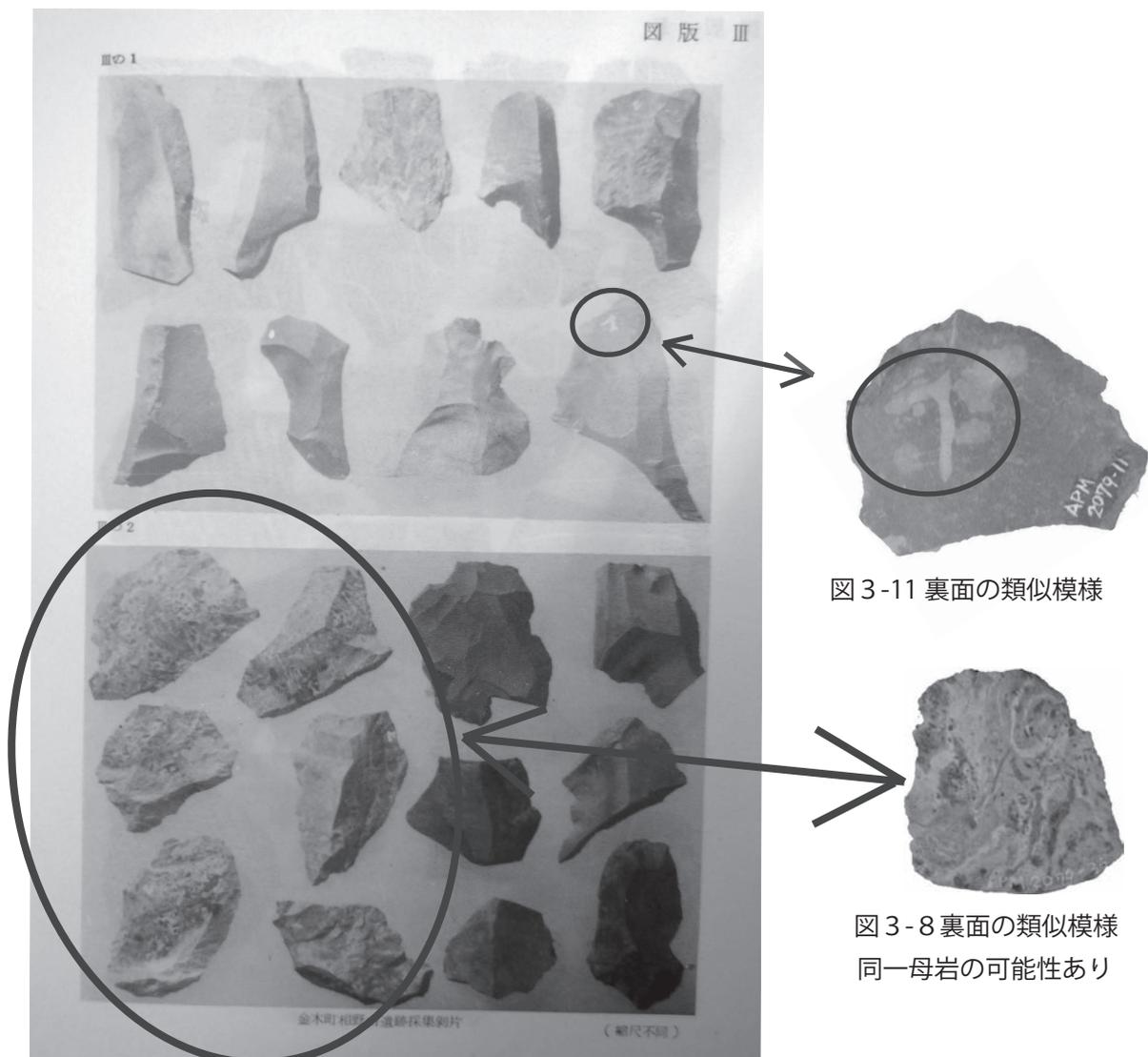
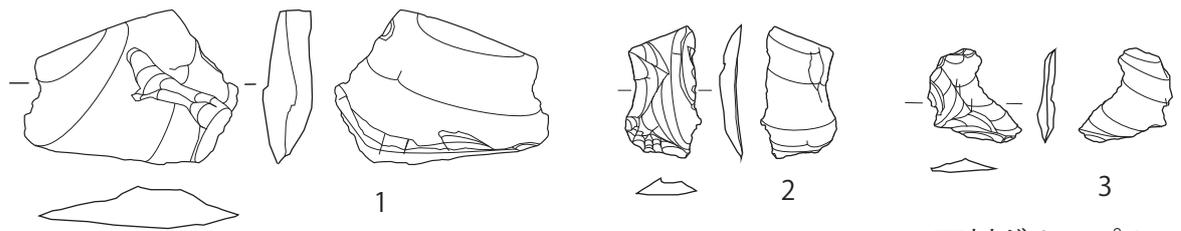
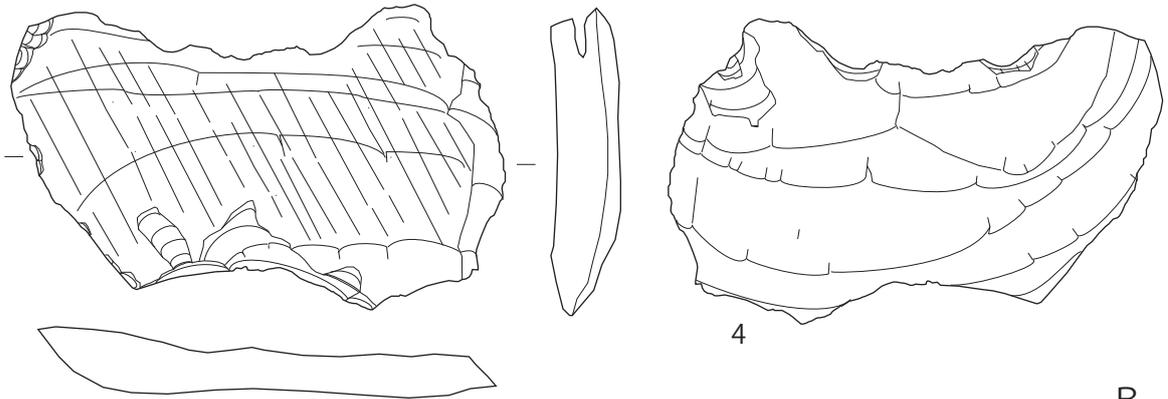


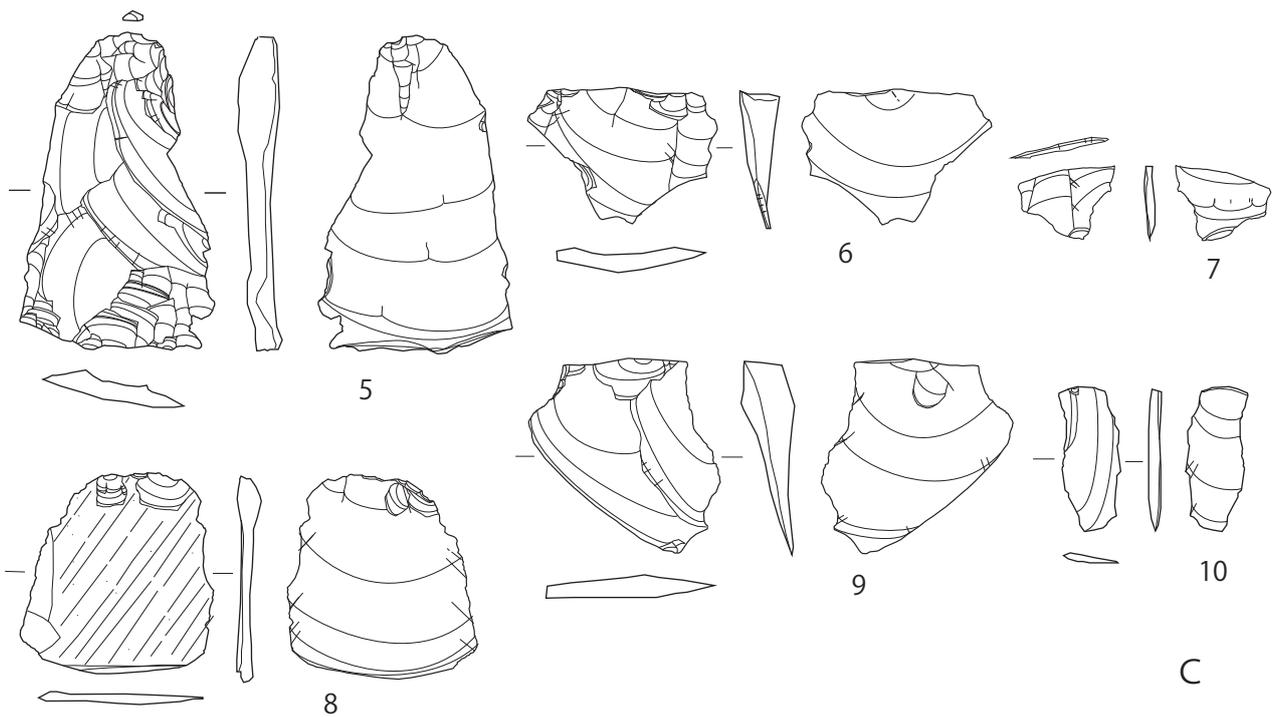
図2 金木高校郷土研究部発行『東日流』に掲載された巻頭図版III 紹介資料は楕円内の6点の剥片と同一母岩の可能性のある資料を含む



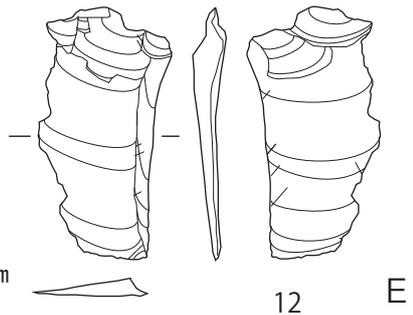
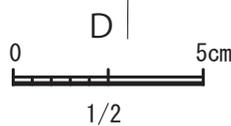
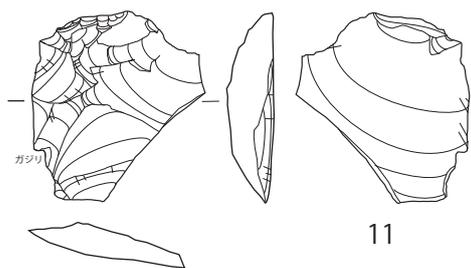
石材グループA



B

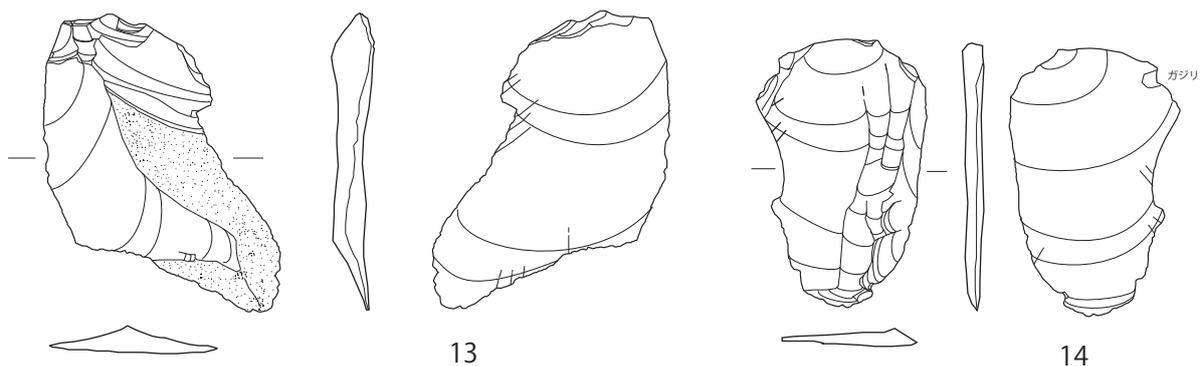


C

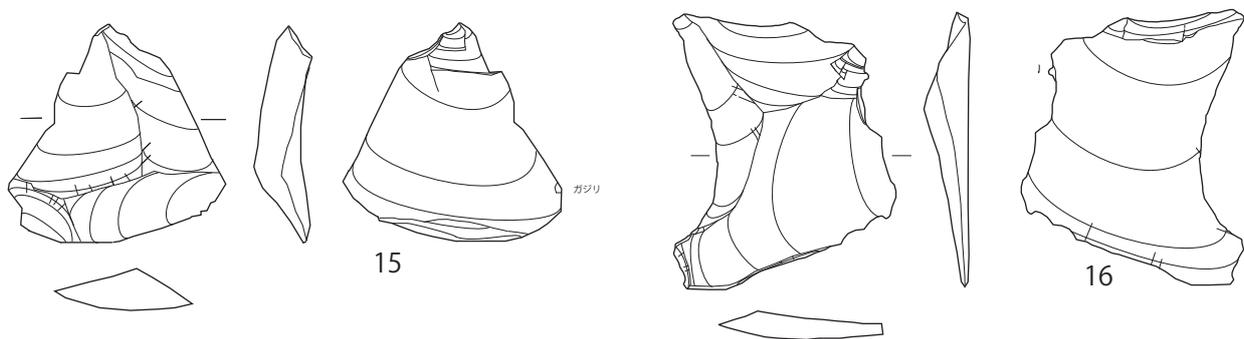


E

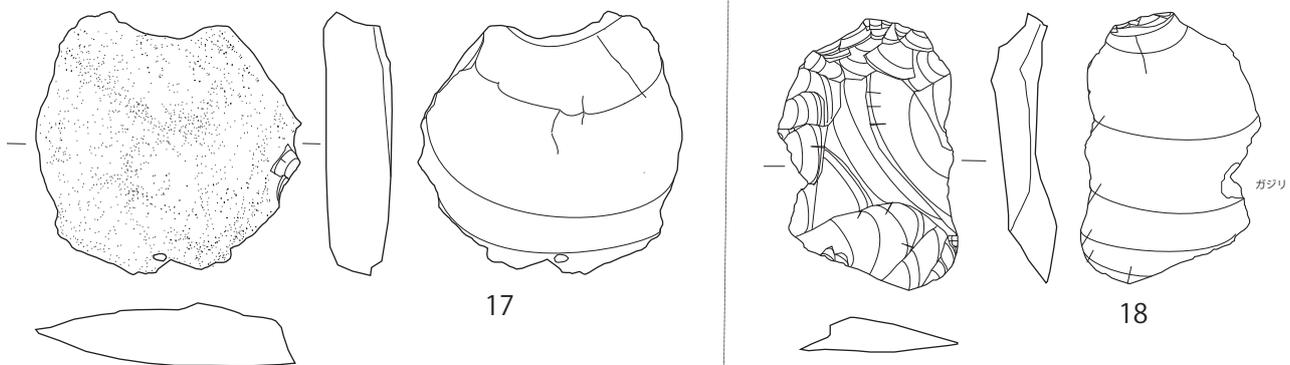
図3 相野山遺跡採集石器 1



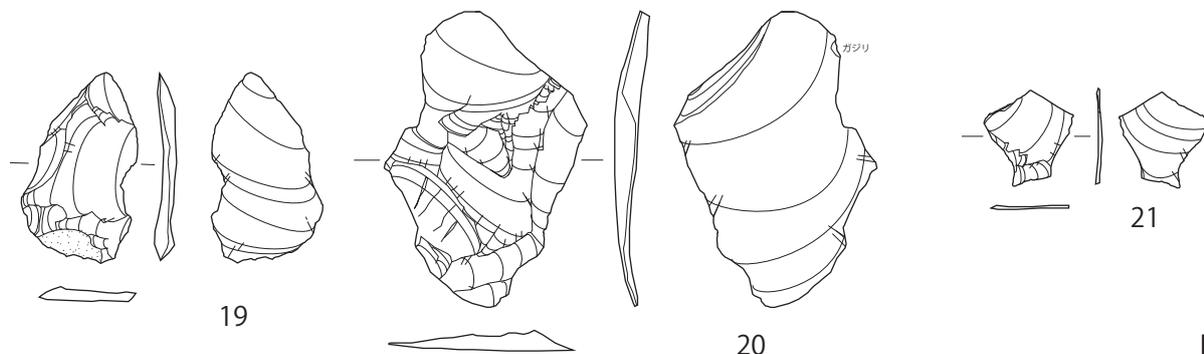
石材グループF



G



H



I

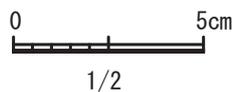


図4 相野山遺跡採集石器2

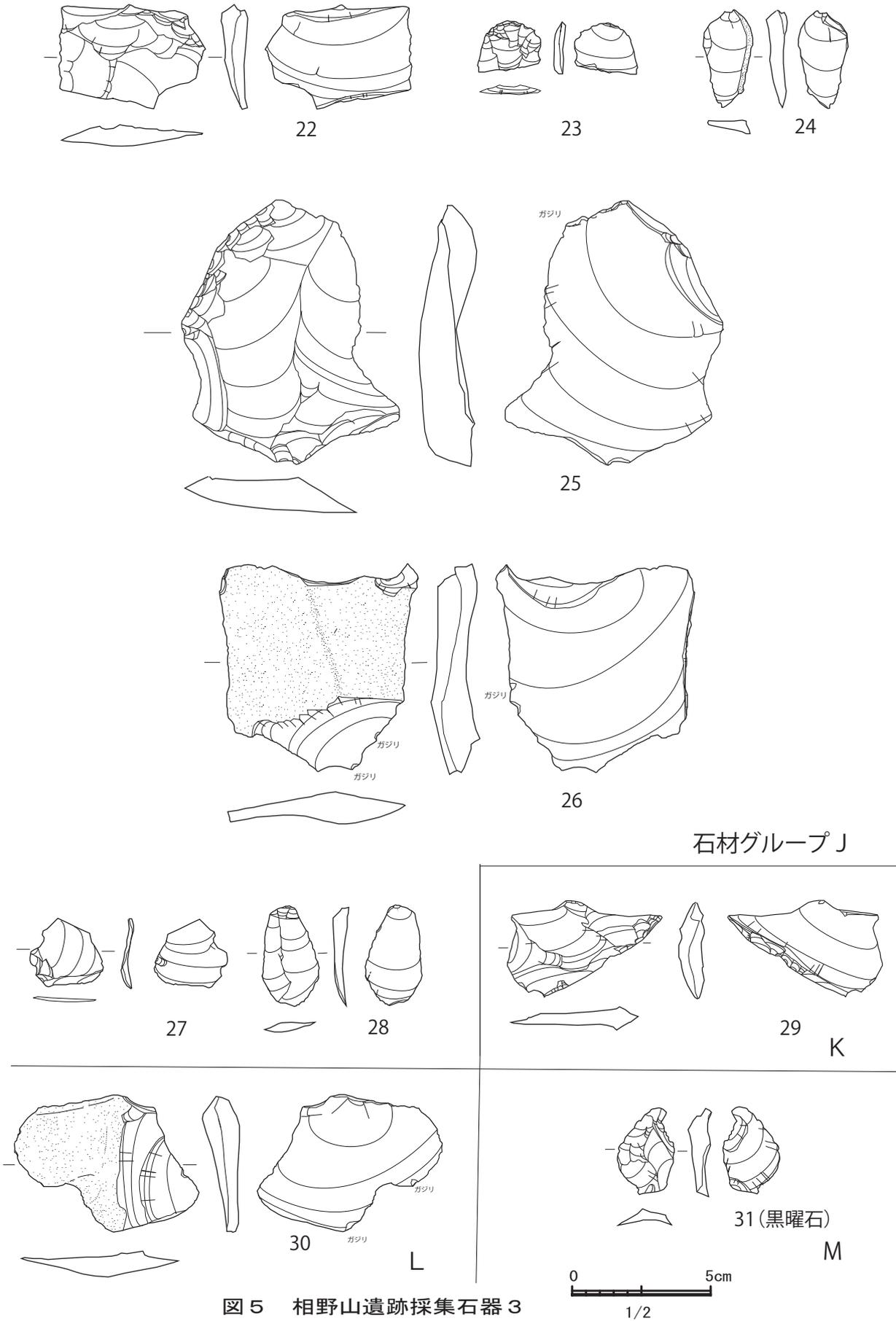


図5 相野山遺跡採集石器3



写真1 相野山遺跡採集石器